

# WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.109

2019.6.25 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

## No.109 目次

平成 31 年度総会報告 (収支報告) .....	2
WRV・役員の再任および新任について .....	3
WRV理事就任挨拶 .....	4
平成 30 年度 野生動物救護獣医師協会講習会・開催報告 .....	5-7
施設紹介—神戸市立王子動物園 .....	8-9
竹富町主催「小学生による身近な自然の調査・研究交流会」イベント参加のご報告 .....	10
書籍紹介—「災害動物医療 ～動物を救うことが人命や環境を守る～」(羽山伸一 監修) .....	11
寄付のお礼 .....	11
事務局日誌 .....	11-12

# 平成31年度総会報告(収支報告)

平成31年4月6日(土)に平成31年度総会がWRV・立川事務所にて開催され、全ての審議案件について承認されました。以下に、平成30年度収支報告・平成31年度収支予算を改めてご報告致します。

## 会計報告 (特定非営利活動)

平成30年度収支報告書(平成30年1月1日から平成30年12月31日まで。単位:円)

収入の部	金額	支出の部	金額
年会費収入	917,000	事業費	
事業収入	480,000	①傷病野生動物の救護と野生復帰	286,965
委託事業収入	8,682,504	②病性鑑定及び疫学調査	0
補助金収入	0	③学会報告、会報、講習会、HP等	5,817,125
寄付金収入	31,241	④野生動物の傷病予防に関する事業	0
預金利息	1,603	⑤生物多様性の保全に関する事業	0
雑収入	0	⑥野生動物の救護施設に関する事業	0
収益事業会計繰入金	0	⑦他団体との交流	76,978
収益事業収入	229,692	⑧収益事業原価	29,607
		管理費	3,068,134
		租税公課(消費税)	482,200
当期合計金額	10,342,040	当期合計金額	9,761,009
当期収支差額	581,031		
法人税等充当金	-70,000		
前期繰越収支差額	37,896,876		
次期繰越収支差額	38,407,907		

### <平成30年度の主な事業実績>

- ・環境省水鳥救護研修センター業務請負事業(水鳥救護研修・情報整備事業等)
- ・同請負事業及び愛知県の協力による現地研修(愛知県名古屋市の実施)
- ・日本獣医生命科学大学、帝京科学大学、東京環境工科専門学校等、特別実習の実施
- ・傷病鳥獣救護活動、および診療カルテの集約、学会参加等
- ・「ヒナを拾わないで!!」キャンペーンの実施(共催)
- ・学術講習会、ボランティア向け講習会等の開催(東京都支部、本部)
- ・関係団体との事業協力および事業への参加(本部、各支部)
- ・動物感謝デー、ジャパンバードフェスティバル等に出展(本部、東京都支部、神奈川支部)
- ・国際協力(JICA研修の実施、NOWPAP MERRAC テクニカルレポートの作成 等)
- ・野生動物リハビリテーター養成事業(神奈川支部、大阪支部)
- ・各地の研究会、委員会、シンポジウム等への参画

—その他

平成31年度予算案(平成31年1月1日から平成31年12月31日まで。単位:円)

収入の部	金額	支出の部	金額
年会費収入	900,000	事業費	
事業収入	500,000	①傷病野生動物の救護と野生復帰	310,000
委託事業収入	8,300,000	②病性鑑定及び疫学調査	20,000
補助金収入	0	③学会報告、会報、講習会、HP等	5,900,000
寄付金収入	50,000	④野生動物の傷病予防に関する事業	10,000
預金利息	0	⑤生物多様性の保全に関する事業	10,000
雑収入	0	⑥野生動物の救護施設に関する事業	10,000
収益事業会計繰入金	0	⑦他団体との交流	110,000
収益事業収入	250,000	収益事業原価	30,000
		管理費	3,100,000
		租税公課(消費税)	500,000
当期合計金額	10,000,000	当期合計金額	10,000,000
前期繰越収支差額	38,407,907	当期収支差額	0
		法人税等充当金	0
		時期繰越収支差額	38,407,907

# WRV・役員の新任および再任について

本年4月に行われました平成31年度・WRV総会および理事会におきまして、正副会長を始めとする役員等の再任ならびに新任の承認がなされました。以下に、その名簿を掲載いたします。任期は2年となっておりますので、会員各位におかれましては、以後改めてよろしくお願い申し上げます。（それぞれ五十音順で記載）

会 長	新妻 勲夫（新妻動物病院 院長）
副会長	小松 泰史（新ゆりがおか動物病院 院長）
副会長	中津 賞（中津動物病院 院長）
理 事	大窪 武彦（おおくぼ動物病院 院長）
理 事	加藤 卓也（日本獣医生命科学大学 講師）
理 事	小山 正人（高坂どうぶつ病院 院長）
理 事	田向 健一（田園調布動物病院 院長）
理 事	中川 清志（中川動物病院 院長）
監 事	倉林恵太郎（倉林動物病院 院長）
監 事	町田 忠彦（町田家畜病院 顧問）

今回は、大窪武彦副会長がその任を終え、新たな副会長に中津 賞理事が就任されました。

また、新たに理事にご就任いただいた中川清志先生に、新任のご挨拶を頂戴しましたので、次ページに掲載させていただきます。

なおWRVでは、今後とも野生動物救護医療の充実と発展を目指していくにあたり、野生動物の治療に携わっていただけるような獣医師の先生方、および動物病院のスタッフの方々のご協力を、広く求めていきたいと存じます。

つきましては、自薦・他薦を問わず、WRVの諸活動にご協力いただけるような方をご紹介いただきたく、会員各位、そして関係者の方々に改めてよろしくお願い申し上げます。

（WRV役員・事務局 一同）



# WRV理事就任挨拶

西東京市議会議員／中川動物病院 院長 中川 清志

野生動物救護獣医師協会（WRV）の皆様、はじめまして。

東京都西東京市（昔、保谷市と田無市でした）で開業をしております、中川清志と申します。

多くの会員の皆様には、母美穂子が存命中には、大変にお世話になりました。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。母美穂子が、生涯を費やしました学校飼育動物に関する支援活動につきましても、日本獣医師会を中心として、今後とも皆様の御協力を得ながら力強く推進していくことと思っております。

さて、この度、小松副会長にお声掛けいただき、WRV理事として微力ではありますが、仕事をさせて頂く御機会を頂きました。

母の頃から、小笠原ネコプロジェクトや東京都委託の傷病鳥獣救護事業、東京都獣医師会感染症セクションなどで野生動物との関わりを持って参りました。そのなかで、今後公衆衛生上の大きな問題となってくるであろう救護対象野生動物・環境に於ける抗生物質の多剤耐性獲得、シカ・イノシシ・サルなどによる農業被害や環境破壊、シカ・イノシシなどの増加によるダニ媒介性疾患などの感染域の拡大、渡り鳥による人獣共通感染症の媒介、野良猫による希少鳥獣の被害など、ヒトが関わることにより発生し、そして解決が中々に難しい問題が山積していると実感しています。

これらの問題を解決していくためには、獣医師という国家資格を授けられた専門家の集団としての獣医師会という大きな幹を中心として、その枝葉となり連係をして花を咲かせ、そして成果を出していくべく、より専門的な学会、研究団体、実践団体などの役割が益々重要になっていくと考えています。

WRVも、その最前線に立つ団体の一つであろうと感じております。

近年、重症熱性血小板減少症（SFTS）の感染域拡大は驚異的です。国立感染症研究所の前田先生は、SFTS ウイルスの抗体保有率は、SFTS 流行地の方が当然に高いのですが、非流行地においても分布していることをご報告なさっています。東京都西東京市に位置する当院でも年に1～2回は診察する事のあるタヌキにおいても、全国的に見れば抗体保有率が上昇していると報告されています。特に流行地においては、2010年から抗体保有率が上昇しはじめ、2015年には、調査したタヌキの30%が抗体を保有していたことが示されています（<https://www.niid.go.jp/niid/ja/iasr-sp/2342-related-articles/related-articles-433/6320-dj433a.html>）。野鳥においてもその20%でダニが採取され、SFTSを媒介するフタトゲチマダニ、キチマダニなどの存在が確認されています。また、ご存知のようにこれら野生動物と家庭飼育動物が接触することにより、ネコ・イヌなどを經由したヒトでのSFTS発症も報告されています。これから先、野生動物の診察に当たっては、厳密なバイオセーフティーの実践が必要になるかもしれませんし、団体として、他の関連団体と連携を取り、その方法を検討する必要があるかもしれません。

また、傷病野生動物の治療に際して、どのような薬剤を選択していくのかという実際的な問題も考える必要があるかもしれません。2018年11月30日に農林水産省動物医薬品検査所が発表した「平成29年度 疾病に罹患した愛玩（伴侶）動物（犬及び猫）由来細菌の薬剤耐性モニタリング調査の結果」によれば、大腸菌だけ取り上げてみてもヒト医療において重要な抗生物質である第3世代セファロsporin系抗菌薬（CTX）、およびフルオロキノロン系抗菌薬（CPFX）に対する耐性獲得率は、30～40%でした（<http://www.maff.go.jp/nval/yakuzai/pdf/H29cyousa20181130.pdf>）。

今後、日本全体の人口が減少していくなか、地方においては益々ヒトの生活領域が野生動物に脅かされていく、都市部においてはヒトと野生動物の生活領域が重なっていく、そのような現実を前に、ヒトと野生動物のよりよい関係性を、皆様とご一緒に模索させて頂くことができれば幸いです。

# 神戸市立王子動物園

神戸市建設局 王子動物園 飼育展示係 菅野 拓

## 【施設概要】

神戸市立王子動物園の前身は1928年に開園した諏訪山動物園です。その後、1950年に開催された日本貿易産業博覧会（神戸博）の跡地を利用し、1951年3月21日に、現在地である神戸市灘区に移転・開園しました。80,618㎡の敷地の中に約130種800点の動物を展示しており、日本で唯一パンダとコアラが同時に見ることができる動物園です。また、神戸市の中心市街地である三宮からも非常にアクセスが良く、神戸市内外から年間約130万人が訪れています。

## 【救護施設の紹介】

持ち込まれた動物は、まず園内の動物病院に運ばれます。診断・治療・入院管理は動物病院の獣医師が中心となっておこないます。傷病鳥獣専用の施設はないので、サイズと病態によって、動物病院内のケージや入院舎等を使い分けます。園内動物の診療もあるため、傷病鳥獣は何らかの病原体を保有しているとの前提で対応し、園内動物への感染症防止に細心の注意を払っています。自力採餌、および鳥類については飛べることを確認できれば野生復帰可能と判断します。なお、園内にソフトリリースを行える施設がないため、ハードリリースとなります。そのため、対象動物の生態を十分考慮し放野場所を決めています。



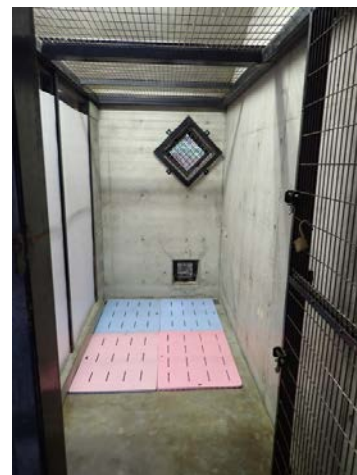
動物病院外観



動物病院内



入院舎外観



入院舎内

## 【保護実績・啓蒙活動】

次ページのグラフは、過去5年間の保護件数です。保護・治療・野生復帰は兵庫県傷病野生鳥獣救護病院及び救護動物園設置要綱に基づき、哺乳類・鳥類を対象に取り組んでいます。高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)が国内で発生すると鳥類の受入れを停止するため、年間保護件数はバラツキがありますが、概ね35件程度です。また、近年は園内動物への感染防止のため食肉目を受け入れておらず、保護の大半は鳥類となっています。王子動物園は市街地・山・海・川と多様な環境が周囲にあり、様々な種の鳥が保護されてきます。保護理由としては、

## 平成30年度 野生動物救護獣医師協会講習会・開催報告

WRV事務局長 箕輪 多津男

平成31年2月17日(日)に、平成30年度「野生動物救護獣医師協会講習会」を例年通り開催いたしました。

会場としては今回初めて、日本獣医生命科学大学の教室をお借りしましたが、獣医師や動物病院関係者のほか、関連分野を専攻している大学生、あるいは東京都鳥獣保護管理員などのべ約50名の方々の参加をいただき、大変充実した講習会となりました。

当日は、まずWRVの新妻勲夫会長より、講習会の主旨や最近の話題等も盛り込みながらご挨拶いただきました。



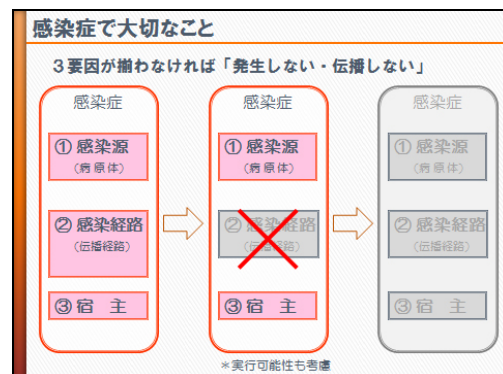
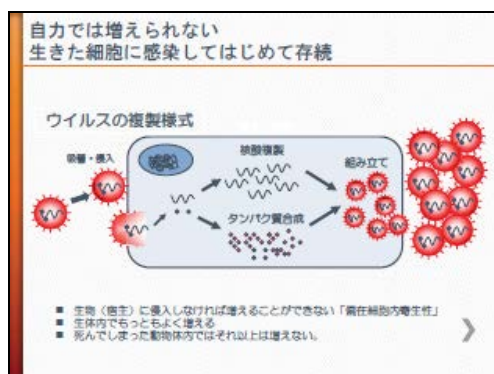
新妻勲夫会長の挨拶



講師：青木博史先生

続いて、日本獣医生命科学大学・准教授の青木博史先生より、「家畜ウイルス感染症－野生鳥獣での発生と対策を考える」というタイトルでご講演をいただきました。青木先生は、日本獣医畜産大学獣医学科を卒業された後、北海道大学で博士号(獣医学)を取得されました。また、農林水産省・動物医薬品検査所や内閣府・食品安全委員会事務局等の要職を経て、2006年4月より日本獣医生命科学大学獣医学部に移られ、現在に至っておられます。ウイルス学や感染症学をご専門とされ、特に現在問題になっている豚コレラに関しては、日本を代表する研究者でおられます。

ご講演ではまず、ウイルスとウイルス感染症の基礎的な解説がありました。その中で、ウイルスは現在の科学的論拠のもとでは、「非生物」と定義されており、生物の生きた細胞に感染しなければ存続、あるいは増殖することができない。一方で、それぞれのウイルスは特定の感受性を持った生物にのみ感染し、環境中では、気温や湿度のほか、物理化学的な要因により感染性を失うことが指摘されました。



青木先生より提供いただいた資料より

続いて、ウイルス感染症については、病原体が存在する「感染源」、「感染経路」そして感染先となる「宿主」の3要因が揃って始めて発生すること、また感染経路には大きく分けて、直接接触や飛沫感染等の「直接伝播」と、媒介物や媒介動物を介した感染や空気感染等の「間接伝播」の二系統があることが述べられました。また、感染症の特異的傾向として、感染を受けた被害者(患者)が新たな加害者に成り得ること、症状が出ていない潜伏期にも感染源となり得ること、それぞれのウイルスごとに独自の感染環(一連の感染経過の循環形態)を持つこと。

そして、宿主となるヒトや動物はそれぞれのウイルスに対して免疫を獲得すると同時に、それぞれの感染症に関して科学的に証明された検査法や予防法が存在し、感染症が発生した際には緊急的対応が求められることが力説されました。

次に、野生鳥獣における家畜ウイルス感染症について、お話しいただきました。

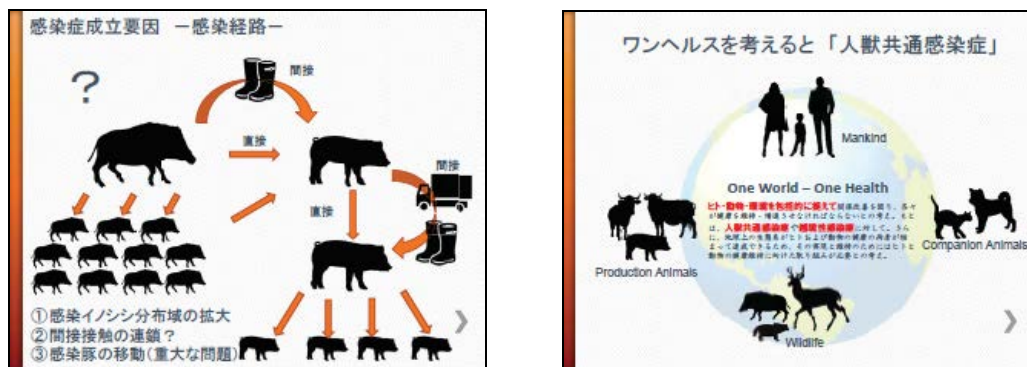
冒頭、イノシシやシカ、アライグマなどの外来種も含めた哺乳類や、野鳥などの鳥類が関与する実に様々なウイルス感染症の存在が示されました。また、基本的に有効な治療法が存在せず、ワクチンによる対応が困難で、しかも症状における特異性の判断が容易でないことが指摘されました。よってバイオセキュリティ、即ちウイルス感染を周囲に広げないようにし、環境を汚染しないよう総合的な防護体制の構築と具体的対策を実施していくことが、如何に重要であるかが問われました。その際、感染源となる可能性もある死体の取扱いについても、十分な注意を払うことが求められるようです。

続いて家畜ウイルス感染症の代表例として、「SFTS」と「豚コレラ」について語っていただきました。SFTS(重症熱性血小板減少症候群)は、最近とみに注目を集めるようになった感染症ですが、既に国内でも死亡例が報告され、またイヌやネコからのヒトへの感染も確認されるなど、野生動物における症状はまだ不明な点が多いものの、ヒトへの感染を極力予防していくことが求められていることは間違いがありません。



青木先生より提供いただいた資料より

一方、これまで清浄国とされてきた日本において、再び発生・流行してしまった今回の豚コレラについては、急性型と慢性型の中間にある病原性のウイルスで、CSFV2.1という日本が経験したことのないタイプのようです。豚コレラに特異的な症状がないために他の豚の感染症との鑑別が難しいとされているうえに、今回のウイルスは強毒でなく、発見が難しく、気付いた時には時間が経過していたり、潜伏期間にあった感染豚が広範囲に移動されたりと、悪条件も重なったようです。同時に、野生のイノシシに感染が広がったため、それらの個体を通じて間接的な形で豚のほうに豚コレラが拡大していったことも大きかったようで、未だに収まっていない本感染症の行方に、当分目を離せそうにありません。



青木先生より提供いただいた資料より

以上の他、ウシと野生のシカの共通感染症と言える牛ウイルス性下痢ウイルス症を始め、野生鳥獣に関わるウイルス感染症の具体例について、いろいろと解説いただきました。

ご講演のまとめとして、感染症対策の基本として、周辺の情報に常に注意を払いながら迅速な発見に努めることや、不顕性のものや野生動物由来のものも含めて人獣共通感染症に意

識を働かせること、そして伝染病に関連する法律を踏まえながら、関係者を中心として適切な体制を築いていくことの重要性が指摘されました。最後に、“One World・One Health”をキーワードとして「ヒト・動物・環境を包括的に捉える」ことを前提に、感染症対策と健康の増進が図られることの重要性が強調され、ご講演を締めさせていただきました。

当日のもう一つのご講演は、日本獣医生命科学大学・野生動物学教室のポストドクターである、森口紗千子先生による「野鳥における鳥インフルエンザの発生リスクを視覚化する」というものでした。森口先生は、東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程を修了された後、(独)国立環境研究所や(独)農研機構動物衛生研究所、新潟大学を経て2018年より現職に就いておられます。

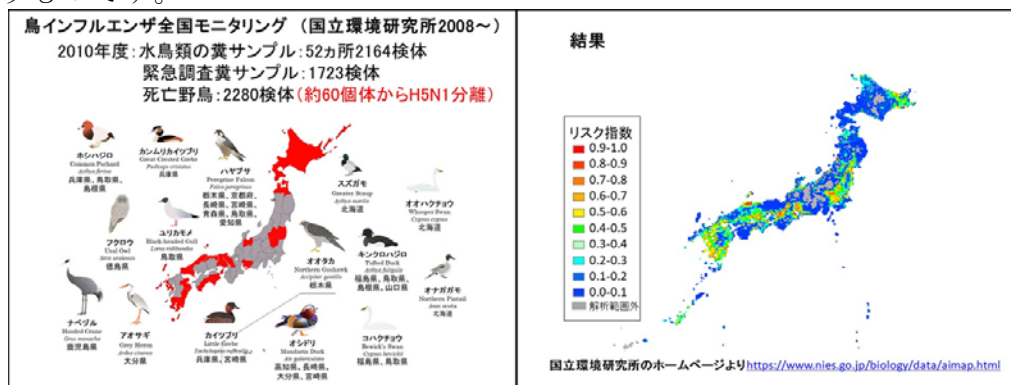


講師：森口紗千子先生

ご講演ではまず、農耕地の鳥類相やマガンの生態、家畜感染症モデル構築等も含めたこれまでのご自身の研究履歴についてご紹介いただき、今回のテーマである鳥インフルエンザの話題に移っていただきました。

鳥インフルエンザは、家禽に対する病原性によって高病原性と低病原性に分けられ、特に高病原性ウイルスが野鳥や家禽、その他の家畜やヒトへ感染拡大していくことが、最も警戒されます。鳥インフルエンザウイルスは、元々水鳥類が自然宿主となっており、中でも淡水ガモ類は感染しても症状が見られず、かれらがウイルスの運び屋を担っている可能性が高いようです。一方、潜水ガモや猛禽類など、それ以外の野鳥については、感染による死亡例もかなりあり、病原性が顕著となります。そこで、将来に向けた鳥インフルエンザ対策における重要なデータ整備として、リスクマップの製作を手掛けられることになりました。

具体的には、鳥インフルエンザの全国モニタリングで得られた発生地点をもとに、カモ類の生息数や農地面積などの土地利用、気候条件等も含めた様々な環境変数から推定するモデルを構築し、環境変数に重みづけされたリスク指数を計算し、全国的なリスクマップを完成するというものです。



森口先生より提供いただいた資料より

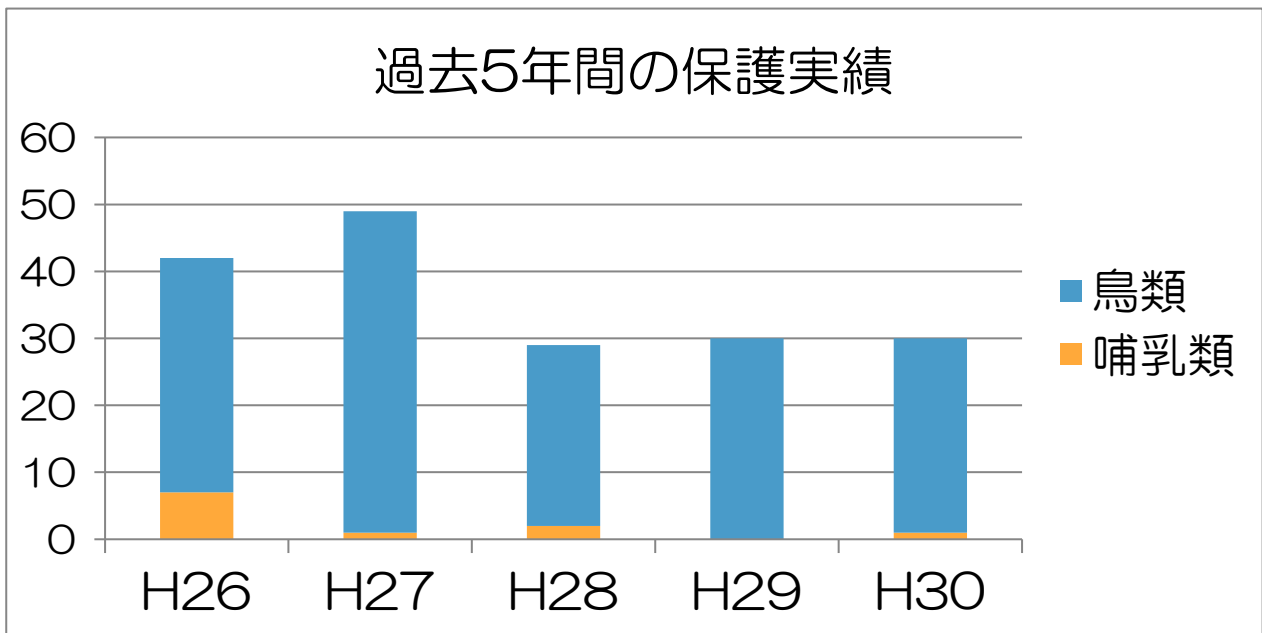
これにより、全国各地における鳥インフルエンザの発生リスクの把握が進められました。同時に猛禽類を中心とする絶滅危惧種など、それぞれの鳥種ごとのインフルエンザの発生リスクと寄与率の高い環境要因の分析も進められています。現在所属されている野生動物学研究室の羽山伸一教授を中心に、特に希少鳥類保全のためのモニタリングの強化や検査体制の整備、そして感染実験による発症リスクの評価などを行う新たなプロジェクトを進行中とのことで、野鳥における鳥インフルエンザのサーベイランスの一層の強化を目指すとのことでした。

以上のようなご講演の後、今回、日獣大の教室をお借りするに当たってご尽力いただいた理事の加藤卓也先生に閉会の挨拶をお願いし、無事に本年度の講習会も終了となりました。

今回、講師としてご講演を賜りました青木博史先生と森口紗千子先生を始め、本事業にご協力をいただきました関係者の方々、あるいは大学の食堂をお借りして開かれました懇親会も含め、当日ご参加いただきましたすべての方々に対し、改めて心よりお礼申し上げます。



衰弱・外傷が多いですが、人間のエゴや勘違いによって誤認救護された巣立ち雛等が持ち込まれるケースも少なくありません。また、当園では野生復帰が困難な動物の一部を園内で展示しています。掲示物には傷病保護鳥獣である旨を記載し、人間の生活の場のすぐ近くに様々な野生動物がいることを伝えています。



#### 【保護活動について】

放生率を上げるためには診療技術だけでなく、育雛技術やリハビリ技術の向上が必要だと感じています。そして、その基礎となるのは、動物種ごとの生態をしっかりと知ることであるとも痛感しています。しかし、こういった知識・技術を学ぶ場は少なく、水鳥救護研修等センターで実施していただいた救護研修は非常に勉強になりました。また、技術・知識の向上と同様に、一般の方々に向けた啓発活動も継続的に勧めていく必要があると感じています。誤認救護防止のため、園内に「雛を拾わないで」という旨の掲示物設置や、教育支援の場で、動物の生死は生態系のサイクルの一部であり人間が積極的に介入するべきではない、と参加者に伝えるなど地道な啓発活動をおこなっているのですが、まだまだ状況は良くなっていません。しかし、海・まち・山で表現される神戸市は、野生動物が身近にいるという感覚を持つ人が多いように感じられますし、その中でも動物園に来援される方々は、一般の方々に比べれば動物に対して興味あり、生態系の中における「生や死」の意味についても丁寧に説明すれば理解してもらえるように思います。今後も動物園獣医師として技術の研鑽に努めるとともに、動物園という場だからこそ可能な野性傷病鳥獣保護についての啓発をおこなっていきたくと考えています。



アカショウビン



アオサギ



アオバズク



イノシシ

# 竹富町主催「小学生による身近な自然の調査・研究交流会」

## イベント参加のご報告

WRV事務局 齊藤量子

本年2月22～23日に、沖縄県八重山郡竹富町（西表島）にて、竹富町主催の「小学生による身近な自然の調査・研究交流会」が開催されました。今回は、日本環境災害情報センター(JEDIC)の大貫伸会長や(株)水圏科学コンサルタントなど、関係の方々のご厚意により同イベントに参加させていただきました。

交流会では、西表島や沖縄本島の小学生が、学校や家の周辺で樹木や蝶の観察から得られた研究結果の発表を行いました。また、その後の体験イベントを通して交流も行われ、違う学校の子供同士で質問をし合ったり、積極的に自然体験をする姿を見ることができました。

研究発表では、小学生がパワーポイントや動画を使い、観察で得られたデータから、しっかりとした研究結果を発表しており、まるで学会のような雰囲気でした。どの学校も丁寧に資料を作り込んであり、調査・研究に対する真摯な気持ちが伝わってくる発表でした。

体験イベントでは、草を使った円座やおもちゃ作り、しぼり染め体験、植物観察会が行われました。植物観察会では、沖縄美ら海財団の阿部篤志先生による、海岸での本格的な植生調査の体験が行われ、小学生も夢中になって参加していました。快晴というわけにはいかず終始曇ってはいましたが、おかげで気温もほどよく、海岸での調査にはもってこいの天候だったのでは、と思われました。沖縄に住む小学生達には見慣れた光景だったようですが、青い海と白い砂浜に生える様々な植物が美しく、私にとっては非常に良い思い出になりました。

西表島には豊かな自然や生き物が多く残されており、独特の時間が流れる魅力的な場所がたくさんありました。西表島に訪れる際は、子供から大人まで虜にするような豊かな自然や生き物に配慮することが求められますが、この魅力ある島の今後には、是非多くの方々に注目していただきたいものです。



小学生による発表の様子



植物観察会の様子

「災害動物医療 ～動物を救うことが人命や環境を守る～」(羽山伸一 監修)

本書は、WRVの顧問を務めていただき、災害動物医療研究会の代表でもおられる、日本獣医生命科学大学・獣医学部教授の羽山伸一先生の監修による、これからますます重要性を増していくであろう「災害動物医療」に関する総合的な研究・解説書です。

内容は、これまでMVM誌(ファームプレス発行)に連載された「動物医療支援学」の論文記事を中心に、VMAT標準テキストの内容等をこれに加え、加筆・再編集されたもので、震災を始めとする様々な災害の発生時における野生動物も含めた動物の救済と医療のあり方について、根本的な意義や理論に始まり、それぞれの現場に必要な獣医療の技術、そして支援対応を実現するための制度や体制づくりに至るまで、幅広くまとめられています。

そこには、羽山先生が代表を務められ、これまで全国各地でVMAT(災害派遣獣医療チーム)に関わる専門家の養成講習会等を展開してこられた「災害動物医療研究会」の諸活動の成果が盛り込まれ、また多くの関係者の方々の

事業協力による活動の発展が大きく反映されています。なお、本書の「重油流出事故と野生動物の救護活動」の項は、WRVの皆川康雄・神奈川支部長が執筆されており、環境省水鳥救護研修センターで行われてきた研修事業も含め、WRVがこれまで取り組んできた事業等についても記載されています。

これからも日本国内においては、様々な災害が発生していくことになることを覚悟しなければなりません。そうした事態に遭遇した時に「動物を救助すること」の意義を改めて見つめ直し、現場においてどのような実践活動を展開していけばいいのか。「災害動物医療」に少しでも関心を持っていただけるよう、一人でも多くの方に本書を手にとっていただければと願う次第です。(WRV事務局長 箕輪 多津男)



「災害動物医療 ～動物を救うことが人命や環境を守る～」 羽山伸一 監修

本体価格：12,000円(税別) サイズ：A4版 ページ：132ページ

発行日：2018年8月24日 出版社：(株)ファームプレス

◆問い合わせ先◆ (株)ファームプレス 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-4-11 KSEビル2F  
TEL 03-5292-2723 注文専用) 0120-411-149 <http://www.pharm-p.com>

【 事務局より寄付のお礼 】

寄付ご協力者(敬称略) (平成31年3月1日から平成31年5月31日)

- 寄付金(一般)2019.5.14 アミ動物病院(安田剛士) 13,684円
- 神奈川支部寄付金 2019.3.3 野毛山動物園(募金箱) 21円
- 2019.3.16 神奈川県野生動物リハビリテーター3,200円 2019.3.24 春の動物園まつり(募金箱) 660円
- 2019.3.24 神奈川県野生動物リハビリテーター1,800円

事務局日誌 2019.3.18～2019.6.16

=== 3月 ===

- 18：野生哺乳類が媒介する疾病と対策についての勉強会(いすみ市体験交流施設「つどいの家」) 出席：加藤
- 18：東京環境工科専門学校生・インターンシップ(犬猫・野生動物救護センター)[神奈川支部] 対応：皆川
- 20：神奈川県総合鳥獣対策協議会(神奈川県庁) 対応：皆川
- 22：SJD グルーミングスクール卒業式(ホテルベルクラシック) 出席：新妻
- 22：かながわボランティア基金21審査会幹事会合同会議(かながわ県民活動サポートセンター)[神奈川支部] 出席：皆川
- 24：ソーラー発電と環境問題会合(東松山市平野市民活動センター) 出席：新妻
- 24：春の動物園まつり(夢見ヶ崎動物公園)[神奈川支部] 対応：皆川
- 25：WRV ニュースレターNo.108 発行 対応：小松、箕輪、齊藤
- 25：第44回わいわいサロン(神奈川県民活動サポートセンター)[神奈川支部] 対応：皆川

26: 練馬区西青色申告会 理事会 (西青色申告会事務所)	出席: 新妻、町田
30: 神奈川県野生動物リハビリテーター更新講習会 (あーすぷらざ) [神奈川支部]	対応: 皆川
=== 4月 ===	
01: 平成31年度「ヒナを拾わないで!! キャンペーン」スタート	対応: 箕輪
06: 平成31年度WRV総会 (立川事務所)	出席: 新妻、小松、小山、倉林、中川、小森、箕輪、齊藤
06: 平成31年度WRV東京都支部総会 (立川事務所)	出席: 新妻、小松、倉林、中川、小森、箕輪、齊藤
06: 丹沢札掛地区シカ個体数調査 [神奈川支部]	対応: 皆川
07: (一社)川道国際学術交流協会総会 (梅の花 京都烏丸店)	出席: 加藤
08: 屋上清掃<都市環境整備> (水鳥救護研修センター)	対応: 齊藤
13: (NPO)丹沢自然保護協会 植樹 [神奈川支部]	対応: 皆川
19: 練馬区西青色申告会指導部委員会 (西青色申告会事務所)	出席: 新妻、町田
20: (NPO)丹沢自然保護協会 総会 [神奈川支部]	対応: 皆川
26: (NPO)自然環境アカデミー・新事務所訪問	対応: 箕輪
=== 5月 ===	
04: 第4回緑化フェスティバル (海老名市いこいの広場) [神奈川支部]	対応: 皆川
06: テレビ朝日 ニュース「スーパーJチャンネル」放送 (イノシシ被害取材協力) [神奈川支部]	対応: 皆川
09: 練馬区西青色申告会 理事会 (西青色申告会事務所)	出席: 新妻、町田
10: 全国愛鳥教育研究会・理事会 (新宿)	出席: 箕輪
12: 東松山動物慰霊祭 (吉見町公民館)	出席: 新妻
12: 神奈川県野生動物リハビリテーター・見学会 (野毛山動物園)	対応: 皆川
12: 第73回全国野鳥保護のつどい (京王プラザホテル)	出席: 箕輪
12: 「島と鳥を学ぶ」<小笠原>シンポジウム (中野サンプラザ)	出席: 箕輪
15、30: 受水槽・機械室点検 (水鳥救護研修センター)	対応: 齊藤
16、24: 東京環境工科専門学校生・野生動物救護実習 (東京環境工科専門学校) [神奈川支部]	対応: 皆川
18: (NPO)丹沢自然保護協会 丹沢フォーラム [神奈川支部]	対応: 皆川
18、19、25、26: 世界カワウソの日イベント (池袋サンシャイン水族館) [神奈川支部]	対応: 皆川
19: 附中小金井12期会 (新日鉄代々木倶楽部)	出席: 新妻
22: 日本コウノトリの会・打合せ (経団連会館)	対応: 箕輪
23: 埼玉県アライグマ対策セミナーー現状の危機喚起と打開のためにー (大宮ソニックシティ)	出席: 加藤
23: 練馬区西青色申告会代議員総会 (勤労福祉会館)	出席: 新妻、町田
26: 第175回麻門会 (麻布大学)	出席: 新妻
26: 神奈川県野生動物リハビリテーター・探鳥会 (夢見ヶ崎動物公園) [神奈川支部]	対応: 箕輪、皆川
27: 第45回わいわいサロン (神奈川県民活動サポートセンター) [神奈川支部]	対応: 皆川
=== 6月 ===	
04、06: 設備点検、定期清掃 (水鳥救護研修センター)	対応: 齊藤
06: 諸事業打合せ (環境省)	出席: 新妻、小松、箕輪
09: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ (犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部]	対応: 皆川
11~13: 受水槽、雨水槽、汚水槽、空調フィルター等 清掃・検査 (水鳥救護研修センター)	対応: 齊藤
14: 東京環境工科専門学校生・野生動物救護実習 (東京環境工科専門学校) [神奈川支部]	対応: 皆川
15~16: 神奈川県野生動物リハビリテーター・見学会&ヒナのさし餌実習 (金沢動物園)	対応: 皆川
15~16: 野生動物救護ボランティア講習会 (神奈川県自然環境保全センター) [神奈川支部]	対応: 皆川

-----

**野生動物救護獣医師協会** (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) [kyugo@wrvj.org](mailto:kyugo@wrvj.org)

NEWS LETTER No. 109 2019.6.25 発行

発行: 特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局: 〒190-0013 東京都立川市富士見町1-23-16 富士パークビル302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人: 新妻 勲夫 編集文責: 小松 泰史 編集担当: 箕輪 多津男